

第18回 豊川流域圏自然再生検討会 議事概要

開催日時：令和7年10月3日（金）10:00～12:10

開催場所：安保ホール7階 701号室

1. 開 会

2. 挨拶（豊橋河川事務所 所長）

3. 議 事

（1）第17回 豊川流域圏自然再生検討会 主な意見と対応

事務局より説明した。意見等なし。

（2）豊川自然再生事業の概要

事務局より説明した。委員からの主な意見は、次のとおり。

<ヨシ原再生>

- ・ヨシ原再生は順調に進んでいるため、今後は野鳥の観察等、地域での利活用を促進する取り組みを考えていくことが重要である。
→今後も引き続き、地域と連携してヨシ原の利活用を進める。（事務局）
- ・ヨシ原再生箇所において、愛知県内では希少となった塩沼植物が確認されており、これらの重要な生育場となっている。
- ・鳥類の種類数の増加について、魚類や底生動物の増加との関連が考えられるのであれば、考察の裏付けとして過年度のモニタリング結果を参考資料に示すとよい。
- ・ヨシ原にゴミが堆積すると、事業に対する印象が悪くなるため、河川管理者としてできる範囲で、市民を巻き込んだゴミ拾い等の対策が必要と考えられる。
→市民団体との情報交換や「川と海のクリーン大作戦」等の取り組みにより、連携を強化していきたい。（事務局）
- ・ヨシ原の魚類・底生生物の調査頻度は5年に1回としているが、ヨシ原内の底質に細粒分が堆積すると、生物の生息状況が変化する可能性があるため、必要に応じて調査の追加実施を検討するとよい。

<干潟再生>

- ・海域（事業範囲外）で粘土・シルト分の堆積が顕著になっており、アサリ等の底生生物の生息への影響が懸念されている。水理モデルによる評価範囲を海域に広げ、粘土・シルト分がたまりやすい場所を明らかにすることはできないか。干潟再生箇所だけでなく、もう少し広範な豊川河口全域の環境変化を考慮した解析が必要と考えられる。
- ・水理モデルにおける供給土砂量の内、浮遊砂については、流量に応じて供給土砂量を変化させると堆積状況は変化するのか確認しておくとうい。
- ・河床変動解析については、洪水低減期のハイドログラフの形状によって、土砂の堆積状

況は変わると考えられる。

- ・ 豊川河口で調査活動を行っている市民団体の情報から、流下する土砂の粒径が細かくなっていると感じている。投入する土砂の粒径はもう少し粗くした方がよいのではないか。
→干潟再生に使用する土砂は、豊川の上流における維持掘削で発生する粒径の粗い土砂を活用している。(事務局)
- ・ 干潟再生の施工箇所としては止水域内だけでなく、新しい視点や別の方法を検討する必要があると考えられる。

＜アサリ着底稚貝調査＞

- ・ 愛知県におけるアサリの漁獲状況は著しく減少しており、その原因の一つに海域に堆積した粘土・シルトによって稚貝が生息できなくなったことがあると考えられる。粘土・シルト分の由来は豊川の上流にあると考えられることから、濁度の変化とダム工事との関連を把握する必要がある。
- ・ 今年のアサリ資源量は顕著に少なく、底質の状況が変わらないと、資源量は回復しないと思われる。現在の六条潟には、一昨年のもう一つの豪雨による洪水の影響で10cm程度の泥が堆積しており、その上に砂が堆積しつつある。
- ・ ダム工事では、濁水対策はかなり考慮して実施しているはずである他、ダムからの濁水は下流の河口域全体に影響を与える程ではないと考えられる。一方、本来であれば流下してくる砂が上流に堆積して、細粒分が目立つようになった可能性は考えられるため、河川の供給土砂量や粒径がどの程度変化しているかは検討する必要がある。
- ・ 上流部はほぼ人工林であり、林床から細粒分が流出しやすい環境であると考えられる。ダム工事によって裸地化した場所に、市民の手で植林を行うことで、広葉樹林に置き換えることができれば、河川の水質や土砂の流入が改善すると考えられる。
- ・ アサリ漁獲量の減少要因について、水温の上昇が漁獲量の減少に影響を及ぼしているのではないかとこの点については、高水温下ではより多くの餌が必要になるため、陸域から海域への栄養塩の流入量の低下が原因であることが示唆されている。もう一つの原因として六条潟で採捕される稚貝量の減少があるが、これには母貝の減少に加えて、濁りが発生した際の稚貝の摂餌障害が重なっている可能性も考えられる。

＜全般＞

- ・ 近年の本検討会における土砂動態や濁りの議論から、より広範囲な視点で豊川流域圏の自然再生に取り組んでいく必要があると考えられるため、今後検討して頂きたい。

5. 閉 会

以上